

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520033

研究課題名（和文） アラン・バディウの数学的存在論と出来事の論理

研究課題名（英文） The ontology of Alain Badiou and the logic of 《 événement 》.

## 研究代表者

藤本 一勇（FUJIMOTO KAZUISA）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70318731

研究成果の概要（和文）：『存在と出来事』と『世界の諸論理』を研究対象とし、両者の連続性と差異を研究した。『存在と出来事』では数学的存在論の領域に議論が限定されており、たとえその限定作業が後の拡張に必要な不可欠なものだったとはいえ、バディウの究極目標である主体化や出来事性にまでは届いていなかった。世界における出来事と主体化の論理を展開する『世界の諸論理』こそ、バディウが真に目指していた地点だということを解明した。

研究成果の概要（英文）：This study treated mainly two principal works of Alain Badiou, “Being and Event” and “Logics of the world” for the purpose of elucidating the continuity and differences of the two books. “Being and Event” is centered and restricted to the mathematical ontology, which disturb the development of discussion to the question of subjectivation and event, final aim of the Badiou’s philosophy. I demonstrate that it is “Logics of the world” that achieves this goal, and that it is the procedure of Generic which is the most important core of Badiou’s philosophy of Event.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学

キーワード：現代思想、数理哲学

## 1. 研究開始当初の背景

アラン・バディウの哲学は、数学と存在論を独特の仕方で接続するもので、その難解さから研究や紹介が滞ってきた。19世紀のロマン主義以来の哲学と数学の分離の潮流もバディウ理解を困難にしてきた大きな一因であるが、とりわけ日本独自の問題もあった。

日本では哲学科の内部でも、かたや文献研究を中心とする存在論や現象学や哲学史研究、かたや論理学や数理哲学とに分離し、両者のあいだで建設的な交流がなされずにいる。フランス哲学系ではこの傾向はさらに強い。フランス本国では想像以上に科学哲学や数理哲学が力をもっている。これはデカルト

やパスカルらの伝統を受け継ぐフランスでは当然のことである。大学圏で見ても、存在論や現象学研究を中心とするパリ第四大学に対抗して、科学哲学や数理哲学を軸に据えるパリ第一大学（ルネ・デカルト大学）の哲学がフランスの哲学界の一大勢力を構成している。ところが日本では、フランスの存在論・現象学・実存哲学の系統のみが一方的に紹介され、フランスで重要視されている科学哲学や数理哲学の紹介・研究はきわめて貧弱である。ミシェル・フーコの仕事なども、科学認識論との関係で研究している学者はきわめて少ない。

私も従来はフランスの現象学・存在論や脱構築思想や政治哲学・社会思想を中心に研究をしてきたが、フランスの哲学的ポテンシャルを知る者として、あまりにフランスの実態からかけ離れ、バランスを欠いた受容のあり方につねづね疑問を感じてきた。ベルクソンやメルロ＝ポンティのみならず、フーコーやドゥルーズやデリダなどの思想も、科学哲学や数理哲学への目配りの問題を抜きにしては正当に扱えないはずである。そこでフランス哲学における存在論と数理哲学の両方の伝統を結びつけている哲学者としてバディウに注目し、彼の哲学の研究を通してフランス哲学の二本柱の関係性や絡み合いを探究できないかと考えたのである。

偏向したフランス哲学受容のあり方を少しでも変えていこうとするときに、バディウの紹介および研究は有意義である。というのも、バディウは上に強調した現代フランス哲学の二本柱である存在論・現象学と科学哲学・数理哲学を股にかけられるばかりでなく、そこに政治哲学と芸術哲学、そして倫理学を大胆に加え、現代では希有になった「体系的」哲学を築き上げようと努力しているからである。彼の言う哲学の四条件（科学、芸術、政治、倫理）はそうしたバディウの本質をよく言い表していると言えよう。

またフーコー、ドゥルーズ、デリダといった先行世代に対する批判者として、バディウの視座を取り入れることによって、ポスト構造主義時代の哲学の問題点を明らかにし、その建設的な批判継承を可能にするという目論みもあった。

## 2. 研究の目的

バディウ哲学の土台である数学と存在論との関係を明らかにし、さらには新しい主体と出来事の論理を探る。存在論の領域では、ヘーゲルやハイデガーとの対決、プラトンの再評価の分析が中心となる。数学ではカントールの創始した集合論、特に空集合の存在論的意味に注目する。コーエンのジェネリックの手法がどこまで存在論として展開可能なのかを明らかにすることも重要課題である。

政治哲学の領域では、神の絶対権力（至高性・主権性）をいかに民衆の主体性に切り替えていくのかという問題について、バディウの政治思想を探る。そこでは世界を変革すると同時に硬直化させもする「独裁」の問題が鍵となる。

またフランス現代思想の流れのなかにバディウの哲学を位置づけ、ドゥルーズやデリダの思考との関係を見極め、新しいフランス現代思想史の地図を作り出す。

## 3. 研究の方法

文献解読による概念操作を基礎とするが、折に触れて、時代環境、政治・経済的構造との関係をも分析する。概念作業と思想史作業を協同させる。後者はバディウの政治哲学を研究する際に必須の方法である。

いずれにせよ、バディウ哲学の対象は広大であるので、必然的に領域横断的な議論と試みとなる。

また直接バディウに面談してインタビューをしたり、バディウにまつわる国際シンポジウム等にも参加する。

## 4. 研究成果

(1) バディウの数学的存在論はハイデガーの詩的存在論に対する「解毒剤」とみなすことができる点を明らかにした。ハイデガーの「存在者たちの彼方の存在」、その「空無」性は、バディウによれば、集合論でいう「空集合」にあたる。あらゆる要素や集合に場を与える包括的集合としての空集合をハイデガーの「存在」として考えることができる。そしてそれはハイデガーが行ったような詩的記述にではなく、厳密に数学に依拠することによって記述可能である。バディウはハイデガーの存在論の重要性を認め、存在の問いを引き受けるが、ハイデガーとは反対に、この問いを数学的対象へと明確化することによって、存在論を文学的・詩的記述の不明瞭さと不透明さから解放し、さらにそうした不透明さから生じかねない政治的・社会的な弊害を除去しようとしている。

(2) 19世紀以降の哲学が行った数学と哲学の分離の系譜を辿り、バディウがその再統合を試みている点を明らかにした。プラトンから近世哲学までは、哲学にとって数学はその理論的同伴者だった。デカルト、ライプニッツ、パスカルにいたっては哲学者が同時に数学者であった。カントでさえも『純粹理性批判』の段階では、数学の大きな支えのうえに仕事をしている。その数学と哲学の関係を切断するのが、ロマン主義的哲学（ドイツ観念論）と実証主義哲学（歴史主義および論理実証主義）である。特に19世紀ドイツ哲学の流れの中では、哲学的思索の重要な柱が数学から詩に転換される。シェリング、ヘーゲル、

ヘルダーリンの関係は言うまでもない。その頂点にハイデガーがいる。バディウはこの近代哲学における数学と哲学の分離、哲学素の詩への転換を批判的に摂取し、そこに数学を再導入し、哲学、詩、数学のあいだに新たな緊張的關係、互いに排除するのではなく、相互に批判しつつ補完しあう条件付けの関係を構築しようとしている。そこでは詩がもつ数学性、また数学のもつ詩的性格が、ともに公理系の発明・創出の試みとして浮き彫りにされ、バディウはこの公理の創出が主体化の構成（客観的であると同時に主体的である構成）として重視していることを明らかにした。

(3) バディウの哲学の大きな特徴の一つはプラトン擁護論（復権論）にある。バディウは現代哲学の麻痺の原因の一つに、十九世紀と二十世紀の哲学を規定したプラトン批判（反プラトン主義）があると指摘する。いわゆる「ポスト・モダン思想」における「現代のソフィスト」たちの跋扈もそこに原因があるとバディウは見る。

バディウのプラトン解釈で重要なのは、アイデアの問題を一種の公理の問題と見ている点である。プラトンのアイデアはどの世界、どの分野・領域であれ、とにかくなんらかの制度や体制を外部から批判し、組み換えて（革命して）いくために必要な公理であり、出来事と呼び招くための空虚な余白とも呼ぶべき装置である。バディウはプラトンのアイデアからその「実在性」を徹底的にはぎ取る。あるいはその「理念性」を徹底化して、場に変革を引き起こすためのポテンシャル空間、空白・余白（空集合）として捉えなおすのである。

善のアイデアを「空虚なシニフィアン」として解釈しているところは、ラカンの影響が大きい。実は同様の議論はレヴィナスやデリダにも見られるところであり、バディウの自己規定とは異なり、レヴィナス、デリダとの近接性を指摘することが可能である。バディウはレヴィナス、デリダの思考を「倫理主義」として批判するが、後者たちの思考はひたすら他者の尊重のみを（場合によっては、他者への従属を）説く「倫理主義」ではなく、他者を「空虚なシニフィアン」や「善のアイデア」の問題として捉え直し、そこにはらまれる政治上・権力上・制度上の様々な問題をえぐり出すのであって、その点でバディウの思想と建設的に交差しうることを解明した。

(4) コーエンの集合論上の手法であるジェネリック（類的なもの）という考え方を、バディウが次のようないくつかの哲学的文脈で応用しているということ、そしてその妥当性を明らかにした。1. プラトンのアイデア論。2. ラカンの「空虚なシニフィアン」論。3. アルチュセールの「呼びかけ」論。4. さらに、バディウ自身は否定的だが、こうしたジ

ェネリックの考え方は、デリダの「来たるべき」(A-venir) という議論やドゥルーズの「マイナー性」ともつながる可能性を秘めていること。以上のような対決的作業によって、バディウが単にドゥルーズ／デリダ世代に対する批判者であるばかりでなく継承者と見る可能性をも（バディウに反して）提示し、フランス現代思想の新しい局面を描く足がかりを築くことができた。

(5) ポスト・モダン思想との対決。バディウは80年代から終始一貫した「ポスト・モダン」思想の批判者であるが、とりわけ真理と主体概念を廃棄し、差異の戯れや言語ゲーム、フィクションや情報技術の生態系を受容するにいたる思想潮流を批判する。そうしたポスト・モダンは真理や主体といった概念をあまりに単純に多数性を抑圧・末梢する単一性や独断性と同一視しており、むしろそれらの複雑さや多様性を独断的に見ようとしな。そうした態度は逆に「真理＝一者の思想」「主体＝統一者の思想」という一者思想を内面化した結果の反動姿勢である。バディウが解体しようとするのは、ポスト・モダン主義者までもがたとえ敵としてであれ設定してしまった「一」の思想がまさに不可能であること、数学的にも「一」が「存在」しないこと、それは根源的な多、集合現象のなかでの操作によって生み出される幻想効果にすぎないこと、これを集合論を用いて立証しようとした。これはポスト・モダン思想よりもはるかに徹底した、根源的な「一者」思想批判となっている。

(6) 政治哲学の関係では、空虚もしくは空集合としてのアイデア論は、政治や社会のシステム内に「非実存」として潜在し、そこからつねにはみ出すシステムの「他者」「異物」の肯定につながり、またそうした「異物」からシステムを審問しなおす可能性そのものを肯定することにつながる。バディウの言うジェネリックとは、こうした異物の普遍性、異物としての類性、システム内で何の「資格」もなく、「何」ものでもなく、どれでもよい「誰か」・何かであるがゆえに、かえってシステムを越える可能性、これを名指したものであり、またそうした潜在性を掘り起こし、現実化させるプロセスのことである。この視点からプラトンの善のアイデアのみならず、ルソーの一般意志やジャコバン独裁あるいはプロレタリア独裁も、体制転覆のための外的権力の肯定として解釈されなおす。

この点では、バディウの議論は、バタイユの「至高性＝主権」論やベンヤミンの「暴力」論を想起させるが、いわゆるメシアニズムの思考を危険視するバディウは、システム外勢力をあくまでもシステム内外の主体の形成によって構成しようとする点にバタイユ、ベンヤミン、ハイデガー（あるいはシュミット）

との違いがあるだろう。デリダの「メシアなきメシアニズム」との相克もこの文脈に位置づけられると思われる。

また、当初は体制外の力なき者たちの（体制内で力をもたないがゆえの）「絶対権力」（独裁力）だった力が、革命後、体制内独裁へと転化していくプロセスをバディウは綿密に図式化しているが、その分析はサルトルの「融解集団」からの転化の議論とかなりの類似性が見られることも判明した。この点はドゥルーズ／ガタリの「リゾーム」と「ツリー」のあいだの相互変容、脱領土化と領土化の二重性・両義性の問題などとも絡めて研究したが、バディウの特徴としては、やはり個的主体化と集団的主体化の双方における主体化に大きな重要性が付与されている点が明らかである。とはいえ、個的主体化にとっての集団的（集合的）主体化の重要性は理解できるが、議論が個と集合の弁証法の域を出ておらず、この点では物理宇宙から精神宇宙にまで通じる外的多性＝他性を導入するドゥルーズ／ガタリの議論のほうが破壊力に満ちている。だが他方でドゥルーズ／ガタリでは主体化の問いが単なる個体化へと縮小されるという弊害もあり、新たな主体化論としては、バディウとドゥルーズ／ガタリの議論を組み合わせる必要があるだろう。

（7）バディウの翻訳・出版については、課題開始当初は課題終了期までに少なくとも『存在と出来事』を出版にこぎつけたかったが、初稿入稿の段階で編集の問題（出版社の編集体制の変更、大量の数式の処理、等々）で手間取り、進行が遅れた。現在まだ初校が出てきていないが、できるだけ早いうちに、出版する予定である。『諸条件』も8割方翻訳が終了しており、こちらは数式等も多くないので、スムーズに作業が進展すると考えている。

以上が主要な研究成果であるが、日本のみならず国際的にもバディウ哲学の需要・評価が進んでいない現状において、本研究は網羅的とは言えないまでも、その第一歩を構築するのに寄与できたと考える。今後はバディウの哲学をフランス哲学の伝統と革新のなかに位置づけなおし、特にラカン、ドゥルーズ、デリダらの哲学との関係性を明らかにする作業を完成させ、20世紀フランス哲学史の書き換えに貢献したいと思う。さらには、バディウ思想の遺産を、数学から政治、芸術、倫理にまでいたる包括的な哲学の構築に活かしていくことが期待される。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

現在まで、本研究の課題に特に強く関わる

発表論文等はなし。今後、バディウに関する著作や翻訳として公刊していく予定である。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤本 一勇（早稲田大学文学学術院教授）

研究者番号：70318731